

入法界品メーガ章における燃灯授記の影響

小 林 圓 照

I. 問題の所在

『華嚴經入法界品』(Gaṇḍavyūha) の彌伽(メーガ)章(梵本 Vaidya 版, pp. 59-63, 六十華嚴 962-963 頁, 八十華嚴 336-337 頁, 四十華嚴(普賢行願品) 684-685 頁)は, スダナ少年(善財童子)の善知識訪問の中にあっても, 特定の職業・職能を示さず, ドラミダ人・メーガ(Megho nāma dramaḍaḥ)と言う種族名を挙げるのみである。またメーガ自身が説法台から下座して善財を礼拝するといった特異な法門であることも従来, 注目されている。この善知識の名は, どの漢訳も「彌伽」で一致しているが, その国土は, デカンの東南部への入り口を意味する, 「南方への街道」の途上, 「金剛の町」と呼ぶドラミダ人の住む地方(dakṣiṇapathe vajrapuram nāma dramaḍa-pattanam)であり, 「自在」国(六十華嚴・入法界品), 「達里鼻茶」国(八十華嚴・入法界品), 「達邏比叱」国(四十華嚴・普賢行願品)となっている。鈴木版梵本はドラヴィダを採用し, 八十華嚴・四十華嚴もドラミダ Dramida ではなくドラヴィダ Dravida であったと考察される。それぞれの都城は, 「呪薬(祝薬)」城(六十), 「自在」城(八十), 「金剛層」城とそれぞれ名が相違している。しかも六十華嚴のみが, 彌伽を良医と呼称しているのは, 呪薬の語と関連して, ドラミダとは, この地方の呪医を言うのであろうか。ただメーガが雄弁な説法師である点から, 教化のシンボルとして良医と呼んだ可能性もある。この小論では, メーガの善知識名およびその内容から, 説法師としての従来の視点も含めて, この章における燃灯仏授記説話(彌伽・雲童子・Megha 授記譚)の影響を明らかにしてみたい。この説話は表面では顕著ではないが, この章の中核とは言えないまでも, 極めてかすかながら背景として, 章全体の発想のベースになっていると考察できるからである。

II. メーガ章の構成

1. 先行する三善友すなわち、徳雲 (仏)・海雲 (法)・妙住 (僧) の各比丘に於いて周知のごとく、三宝が中心テーマとなったが、続いて第四番目の善友メーガを尋ねる導入部では、スダナ少年は、佛への随順、法への浄信の想いから「三宝の家系」を断絶せぬようにつとめ (triratna-vamśānupaccheda-prayuktah), あらゆる世界を浄化しようとする請願から離れることなく、いかなる仏集会のマンダラさえも依拠せず (sarvabuddhapaṣaṇmaṇḍalāśrita-vihāri), 自在に、ヴァジラプラムと呼ぶドラヴィダ人の町へ、メーガを探し求めて行く。近づいて往くと、メーガは町の十字街路上に説法のための獅子座に登って一万の聴衆を前に「文字の輪の回転の莊嚴」〈cakrākṣara-parivartavyūham dharmaparyāyam〉と言う名の法門を説いていた。「言語表現の輪の、すばらしく華麗な展開」を意味するのであろう。次いでスダナは正覚に向かって発心したことを告げ、12の菩薩行のあり方を問う。要約すれば、どのようにすれば、菩薩は、志願を堅固にし、懈怠なく大悲の力、ダーラニーの力、闇を破る智慧光明、巧妙な法、義、辞、弁による音声の世界を円満にするか、自在な弁才力を成し遂げることができるか、如何にすれば念力や了解の力や三昧の力によって、法輪の平等、法の理解、教示の意味の決定と分類に集注することができるかと質問する。

2. そこでメーガ大士は、獅子座を立ち、下座して、スダナ少年に五体投地の敬礼をし、黄金の花をまき散らし、高価な宝石や抹香を散ずる。また色とりどりの百千の衣で覆った。このような供養・尊重ののち、スダナの発菩提心を称賛し、その様な発心者は、10の系譜 (vamśa) の保持に努力する人であると説く。それらは、(1) あらゆる仏の系譜を断絶しないように努力する人、(2) あらゆる離欲の系譜を知らしめる人、(3) あらゆる国土の浄化に努力する人、(4) 法の系譜の達成、(5) 業の系譜に汚されず、(6) 菩薩行の系譜を円成し、(7) 誓願の系譜から逸脱せず、(8) 三世のあらゆる存在について智慧をもって通達しようとする人、(9) 解脱の系譜を堅固不動のものにしようと努力する人である。

そしてそのような人々は如来の威神力によって護念され、菩薩との平等性を獲得し、聖者に随喜され、人天によって、供養・尊敬・称賛される存在となる。そして正しくその人が菩薩であり、そこに菩薩の比喻が説かれる。1、菩薩は得難い人で衆生の慰安となる。2、衆生の父母となる。3、人天世界の莊嚴となる。4、困難苦悩の人の避難所である。5、衆生を護る休息所、6、恐れおののく人の元氣、

7, 三悪への墮落を止める風輪, 8 善根を育てる台地, 9, 福德の宝庫である大海, 10, 智慧のかがやく太陽, 11, 善根に聳える須彌山, 12, 覚の場にのぼる圓月, 13 魔を破る將軍, 14 勇敢な戦士, 15, 我執を枯らす熱気, 16, 法雨の雲, 17 信解の芽をのぼす雨, 18, 法海を渡す船頭, 19, 衆生の橋梁, 20, 人々の集まる沐浴場であると説く。このような「菩薩」への喩説は、そっくりそのまま「善知識」にも当てはまる比喩でもあり、入法界品の諸処に見られる。

以上、メーガは、長々とスダナの発心を、大弁説をもって「よきかな」と賞賛する。その間、メーガ大士の口 (mukha-dvāra 面門) からは、三千大千世界を照らし出すほどの大光明が噴出していた。

3. その光明に照らされて、大士の元に集まる人天・衆生は、歡喜に満ち、メーガから輪字莊嚴の教えを聴聞して、正覚への道において不退転となった。そこでメーガは本座に還り、自分の獲得している法門は、「弁才のダーラニーの光明」(bodhisattvānām sarasvatī-dhāraṇyāloka) と呼ばれ、それによって三千世界のあらゆる天、半天半人、人間界や生きとし生けるもののすべての言語の多種・多様性と、同時に、同一性に精通しているという。加えてあらゆる言語の言葉・名称・慣用法・方言・音声・音質に精通しているとも説く。

4. メーガの法門と同一線上にある行とその成果については、他の優れた菩薩達が知っていると言う。それを要約すると、衆生達の種々雑多な「ことばの海」すなわち、名称、呼称、叙述、仮説、慣用法、語句の適用、意味より叙述を重視する場合、三世の存在を一つのもので表現する方法、語句・詩句の積み重ね、あらゆる世界のことばと音声の領域の海に入っている菩薩達がおられること、教化への言葉の世界とそのサイエンスの広大で甚深であることを展望し、その海に趣入することをスダナに勧める。

5. 以上のような教門を授けて、スダナに次の善友、ヴァナヴァーシ (Vana-vāsī nāma janapada 住林の地方) にいるムクタカ長者 (muktaka nāma śreṣṭhin) を紹介する。スダナは分かれがたい想いをもってメーガのもとを去るのである。

Ⅲ. メーガ大士の法門の意図と問題点

(1) まずこの章で問題となるのは、〈ドラミダ人〉の設定に、言語・風俗が相違する地方辺境であることを背景とした異境的な意識が汲み取られるのではないかという点である。その住処も Vajrapuram nāma dramīḍa-paṭṭanam 〈金剛の町と呼ばれるドラミダ人の地方〉である。神話的世界ではあるが、もし諸神の敵であり、

金剛の臍 (Vajra-nābhi) をもつダーナヴァ (Dānava) の都市, Vajra-nagara に着目し、この場に比定できるとすれば、異境性、辺地性はより高まる。市街の中央でメーガが説法しているとき、スダナが菩提への願心を発したことを聞き、菩提道のあり方を尋ねられて、メーガは、その獅子座から降りてスダナに五体投地の最高の礼拝をなし、散華・賛嘆までしている。通例スダナ側が「聖者よ」(ārya) と呼びかけて善知識を礼拝する形式とは逆になっている。そのことは入法界品では、弱年ながらスダナの発菩提心に恭敬尊重の念をもった (bodhisattva-gauravena 菩薩へ師事・尊敬する意によって) という理由を挙げてはいるが、この経形成時代にこの地方の文化に対して異界観と蔑視を抱いていた人々に対して、偏見を破る意図が菩提心への尊重と言う形で説明表現されたと推測される。表面には出てこないが、ドラミダを卑賤とする意識を転化しようとする作者の意志があったのかも知れない。

このドラミダ人と同じく被差別的な位置にあるダーサ (Dāsa 奴僕・隸民) の存在も、入法界品では善友とされ、その職業は、ダーシャ (dāśa あるかは dāsa とも表記する) 船頭、船主、船師であり、名はヴァイラ (Vaira, 婆施羅, 自在とも訳される。第22番目の善知識) である。しかしヴァイラ章の記述には、クーターガーラ都城の海岸において、かれの海洋航行に関する豊かな知識を聴聞しようと百千の貿易商や大衆に囲まれて講説してしる存在であって、差別的な表現は片鱗もない。ダーサの語が先住の敵対者、征服された者、隸民階層の意味を持ち、ダーシャないしダーサと呼ばれる船師の職業も社会的に下層の存在であることを知り、加えてヴァイラの語が (敵意のある、確執する) の原意のあることを知りつつ、この経は、大悲の旗印を掲げ、一切智者性の海洋に入るための菩薩道を説いている。その点からは、Vaira は Vira (力のある人、英雄、指導者) でもある。表面には現れないが、社会的マイナスの価値をプラスに転換する作業と深い意図がこの経に込められているのではなかろうか。

(2) 次の問題は、雄弁な説法師 (Dharma-bhāṣaka, Kathā-puruṣa) としてのメーガの職能である。下座より本座に還ったメーガは字輪 (cakra-akṣara) を自在に回転する。すなわち説法の弁才を発揮する。事実上メーガの職能は、雄弁な説法者として描かれ、菩薩たちの異なる多言語の世界に入って不退転 (avinivarta) の弁才を転じて自在に活躍するのである。

(3) 最後に「ことばの海」への趣入、すなわち菩薩の言語世界の展開である。

菩薩の言語世界の考察に関しては、この経に至る背景を注意して置くべきであ

ろう。すなわちディヴィア・アヴァダーナの 32 種の文字・言語、さらに般若系の四十二字門やラリタヴィスタラの六十四種などの文字・言語の知識 (lipi-jñāna) との関連も考察されるべきである。

IV. 燃灯仏授記（雲童子本生譚）との関連の解明

一般に燃灯仏授記話のうち「雲童子本生」に関連する資料としては、主として『四分律』（大正蔵 22.784a-785c）、『仏本行集経』（大正蔵 3.665a-667c）、『大事』（Mahāvastu, Senart 版, Vol. I. pp. 231-243. Vaidya 版. pp. 181-192）などが挙げられる。その中でもガンダヴューハ・メーガ章と対照して、しかもその発想に係わる諸点の残影として最も多く指摘される要素をもつのは、四分律と考えられる。その資料に基づいて考察すると、

(1) ドラヴィダ人メーガ大士に対しては、四分律では、バラモン出身の行者で、雪山南麓の珍宝仙人の弟子五百の中の第一弟子であり、他の弟子を教授し、父母は真正七世清浄のメーガ青年である。四分律は彌却、仏本行集経は雲童子、大事は Megha であり、名称は一致する。

(2) メーガ大士のスダナ少年への礼拝・散華・称賛とメーガ青年の燃灯仏への敬信は誓願授記の原点である。マーナヴァ・メーガは燃灯仏前に散華をし、その七茎花は仏威神力で空中花蓋となって国中を香気で覆う。そして鹿皮衣を仏足下に敷き、泥上に布髪して、定光如来の授記を得るまで、「形枯命終するも起たず」と、心に願を起す。一方、布髪はないものの、発心したスダナにメーガ大士は、未来の釈迦文仏である彌却の姿を投影させている。彌却が蓮華城の祠祁に入ったとき、大威神光明を放ったことも、メーガ大士の面門光明との関連が考えられる。彌却の輝く姿をみて、その場のバラモンたちが「皆ともに高声に善と称して」、彼を上座に移ることに賛同し、散華・焼香し、敬礼したことも、メーガ章で、スダナにたいしてメーガ大士の採った態度と重なる。

(3) メーガ大士の下座と、十二醜がメーガ青年に第一座を譲ること、差別的問題を窺わせる背景がここに根ざす。十二醜は、彌却の敵対者となるバラモン学僧であるが、その名が示すように背、頭、目、歯、手、脚といった全身が身障の姿である。蓮華城での彌却とのコンテストで敗退し、第一上座から降ろされる。ドラミダ・メーガは、種族的な面での蔑視と関連するが、十二醜の場合は、身障差別の背景がある。雲童子本生の影がメーガ章構成の上に影響を及ぼしているのではなからうか。無論、ガンダヴューハそのものには、種族・身障どちらにも差別的な

取り扱いはない。しかし着想の素材のなかにその影があることを知っている。そしてそれを積極的にメーガ章で、プラスに転化しようとする意図が窺える。更に十二醜は、四分律の構成の上では、ダイバダツタの前生であることも看過できない。そこに積極性はなくとも、善知識の名においてダイバダツタを逆転させた『法華経』と同趣の傾向をガンダヴユーハのドラミダ・メーガを通じて、見ることも可能であろう。

(4) ガンダヴユーハの説く説法者として教化のサイエンスとの関連では、蓮華城でのコンテストに出るバラモンの經典知識比べにその発想の素材がある。その知識の数量の応酬に関して言えば、『増壹阿含経』第十一「善知識品」(正蔵 596-599頁)の超術梵志の記述が詳細である。

V. 結 語

通常、孤峯頂上に静思経行するメーガシュリー(徳雲比丘)の三昧の姿に、真実・絶待の世界を窺い、それと対照的に、十字街頭のただ中で大衆に説法するメーガのあり方に教化の実際を知ることができるとされる。その点、正しくメーガは輪字莊嚴の説法者である。当然ながらそこには、あらゆる衆生に対する教化のサイエンスが展開される。豊かな「教説のための言語学」が中心テーマとなる。しかし第V章で、諸点を挙げて検討したごとく、この彌伽章を描くデッサンの中で、燃灯仏授記話の一部を構成する雲(メーガ)童子本生の部分が主要なモチーフとなったことが推定できよう。なおガンダヴユーハ・アーシャ章に、燃灯仏の記述があり、その系譜の第9番がヴァジュラナビー(金剛臍)であり、六十華嚴のみが、「自在」仏と訳していることも、ドラミダの金剛の町を六十華嚴のみが「自在」城とする関連をも注目したい。また当然ながら、燃灯仏の思想とその過去・未来に互る「系譜」(ヴァンシャ)の重視は、メーガ章の中に色濃く反映している。

* 主な注記の内容は本文中に記述し、他の詳細な注はすべて省略した。

〈キーワード〉 ガンダヴユーハ、ドラミダ人メーガ、説法師、輪字法門、燃灯仏授記
(花園大学教授)